書籍紹介

肢体不自由関係

書籍名：脳性麻痺ハンドブック
—療育にたずさわる人のために
著者　：穐山富太郎・川口幸義　編著

出版社：医歯薬出版株式会社

（内容紹介）
脳性麻痺の療育に関する最新知見をふまえ，NICU から青年期にわたる予防、診断，評価，治療アプローチを詳細に解説してある。療育の具体的アプローチでは特に手術療法，理学療法，スポーツ療法，姿勢保持具などの医学的療育や 2 次障害，施設生活，就労に関する法律など幅広い知識が図・写真・表を多用し解説されている。専門的な記載が多く、療育関係者向きであるが、親としても詳しい知識を得たい場合には大変参考になる。

書籍名：発達障害児の新しい療育
—子供と家族とその未来のために
著者　：今川忠男

出版社：三輪書店

（内容紹介）
理学療法士・作業療法士が脳性まひを中心とする、発達障害児の療育を行っていくにあたり参考になるような、新しい療育理念や技術の基盤などが解説してある。その中でも、姿勢運動行動の発達・学習・発達（社会性、情緒面、認知）など治療を展開する上で必要な項目が概念的にまとめられており、重症心身障害児（者）の症例検討をとおして、具体的なポジショニングやハンドリングなども図解つきで紹介されている。また、療育の今後の課題である療育効果判定についても、客観的な効果判定法が紹介されている。

書籍名：脳性まひ児の 24 時間姿勢ケア
—The Chailey Approach to Postural Management
著者　：今川忠男　監訳

出版社：三輪書店

（内容紹介）
脳性まひ児の姿勢ケアや治療、器具作製のために必要な姿勢能力に関する評価法を、臥位・座位・立位について段階別にまとめられており、症例検討を通して具体的な評価の仕方が紹介されている。他にもこのアプローチで行われる治療や器具が、正常運動制御の促進、日常生活能力の改善、変形の進行予防を行うために必要な一貫した方法を作成できたり、継続した評価や治療者間でのコミュニケーションのための共通言語としても利用できたりする事などが紹介されている。

書籍名：脳性まひ児の家庭療育

著者　：Nancie R.Finnie　編著　　杉浦一郎　鈴木恒彦　訳

出版社：医歯薬出版株式会社

（内容紹介）

脳性まひ児を持つご両親の子育てを手助けするために書かれたもので、脳性麻痺のタイプ分類、子供の性質、子供と遊ぶときや援助する際のハンドリング法、子育ての考え方、楽しみながら訓練にもなるおもちゃや道具など、脳性まひ児のさまざまな側面について図や表を多用し詳しく解説してある。専門的治療と日常育児をどうつなげるかがわかりやすく、困ったときに見返す本として利用できる。また、療法士がご両親へのアドバイスをする際にも、伝えやすい内容である。

書籍名：赤ちゃんの運動発達　絵でみる治療アプローチ

著者　：Regi Boehme 著　芝田利生，櫻庭　修 共訳

出版社：協同医書出版社

（内容紹介）

脳性麻痺の障害をもつ赤ちゃんの運動発達を分析し，その治療アプローチについて，懇切丁寧に書いたものである。姿勢の機能的な発達を 30 のポイントで示し，発達の流れの見方と援助の方法をわかりやすいイラストとともに解説してある。本来セラピストのために書かれたものであるが，保育，看護，その他の専門職にはもちろん両親など保護者にも大いに役に立つ書であろう。内容の理解が容易であるということに加え，治療アプローチを通じて障害をもつ赤ちゃんへの接し方を本書によって学ぶことが可能といえる。

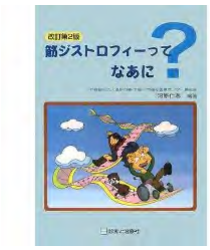
書籍名：アテトーゼ・失調・低緊張の評価と治療
　　―子どもへの感覚運動入力の実際

著者　：Regi Boehme 著　調　誠也 訳　芝田利生，
　　調　信子，直井富美子，鈴木ほがら，星野英子 監訳

出版社：協同医書出版社

（内容紹介）

脳性まひを中心として、ダウン症や精神運動発達遅滞など筋緊張の動揺や低緊張をもつ子どもたちへのハンドリングを、子ども自身の世界の感じ方に視点を置き、図や用語解説などを多く用いてわかりやすく解説してある。専門職はもちろん保護者の方が見てもわかりやすく、こどもたちとの関わり方の参考になる。



書籍名：筋ジストロフィーってなあに?

著者　：河原仁志

出版社：診断と治療社

（内容紹介）

筋ジストロフィーの患児とその家族へ向け，病態，日々の生活を送るための具体的なアドバイス，療養治療，患者の実際の人生体験などを専門医や患者が詳しく説明している。最新の遺伝子治療の情報もやさしく解説し，さらに充実した改訂第2版。患児が自律的で豊かな人生を送るための，医療と心理の両面からのサポートとなる一冊である。

書籍名：運命じゃない!―シーティングで変わる、障害児の未来。

著者　：山崎泰広

出版社：藤原書店

（内容紹介）

著者ご自身が脊髄損傷で車椅子利用者である。「アクセスインターナショナル」という車椅子、座位保持装置の輸入会社を経営しながら医療職とは違う立場で「シーティング」普及のためセミナーを開催されている。この本は障害を持つ子どもと家族に向けそのセミナーの内容をまとめたものである。シーティングによる二次障害の予防を説明してある。

書籍名：注文でつくる 座位保持装置になった「いす」
―障害者の道具づくり・でく工房の 30 年

著者　：矢野陽子

出版社：はる書房

（内容紹介）

１９７４年、佐世保出身の竹野、松枝、光野さんの３人が東京練馬で「でく工房」を開設。取り組んだのは障害児・者の生活道具作りであった。でく工房と仲間たちの仕事は広がり公的に認められ国の制度となり１９９０年「座位保持装置」となった。この本はでく工房を中心に他の工房も取材しながら「いす」が「座位保持装置」になっていく過程と今をルポルタージュしたものである。生活道具に姿勢保持の考え方が入ってきた経過を知ることが出来る。

書籍名：あなたは私の手になれますか
　　―心地よいケアを受けるために
著者　：小山内美智子

出版社：中央法規出版

（内容紹介）

１９５３年生まれ、脳性麻痺でケアを受けるプロを自認する小山内さん。本著より「なぜ、この原稿を書こうと思ったのか。それは私は生まれながらに手足に障害をもっており人の手を借りなければ生きていけない立場にあるからだ。しかし、泣き言でもなく文句でもなく、どうしたらうまくケアを受けて生きていけるか、また、発展的な希望をもって生きていけるかということを書き綴りたい」ケアを受ける当事者の声を知ることが出来る。

発達障害関係

書籍名：ADHD 及びその周辺の子どもたち
　　－特性に対する対応を考える
著者　：尾崎洋一郎 池田英俊 錦戸惠子 草野和子

出版社：同成社

（内容紹介）

「なぜこのような行動をするのだろう」「どう指導したらよいのだろう」と ADHD とその周辺の子どもたちの理解と対応に悩んでいる教師のために書かれた本で、ADHD 児の障害の特性の理解を図るとともに、教育現場において子供たちにみられる具体的な様子を挙げ、対応や指導の工夫について一つ一つの項目ごとにイラストを多用しながらわかりやすく説明してある。

書籍名：学習障害(LD)及びその周辺の子どもたち
　　－特性に対する対応を考える
著者　：尾崎洋一郎　草野和子　中村敦　池田英俊

出版社：同成社

（内容紹介）

「特別な教育的ニーズ」が必要な学習障害（LD）児への理解を深めるために、学習障害が生じるメカニズムやLD児が示す困難さ、指導の基本的な考えなどが書かれている。またLD児が示す様々な困難さ（音読、書字、計算、手先の不器用さ、環境への不適応など）に対し、すぐに実践できるような対処法がイラスト付きでわかりやすく説明されている。イラストも豊富で具体的対処法の入門書として大変参考になる。

書籍名：高機能自閉症・アスペルガー症候群及びその周辺の子どもたち－特性に対する対応を考える
著者　：尾崎洋一郎 草野和子

出版社：同成社

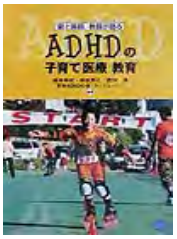
（内容紹介）

高機能自閉症・アスペルガー障害について、その本質がどこにあるのか、彼らをどう理解していけばよいのかについて、わかりやすく説明されている。また対応についても理論編・実践編と分かれて書かれており、広汎性発達障害をもつ子どもにかかわる方々に知って欲しいことや、集団行動時のトラブルや離席、新奇場面への適応の困難さ、ゲームのルール理解が難しい時などの支援方法などが、コンパクトにまとめられている。イラストも豊富で具体的対処法の入門書として大変参考になる。

書籍名：LD 児サポートプログラム
—LD 児はどこでつまずくのか、どう教えるのか
著者　：竹田契一 監修 太田 信子、田畑 友子、西岡 有香 著

出版社：日本文化科学社

（内容紹介）
LD 児に対し神経生理学・認知心理学的見方から、どのように学び方が違うのか問題点を整理し説明してある。更に、子供の遊びや学習活動の中から原因を考え、その原因に応じた指導の目標や指導内容を組み立てた理論的根拠が明確に記載されている。具体的に遊びやゲームを通したソーシャルスキルやことばの学習についてもイラストを豊富に取り入れ、わかりやすく紹介されている。



書籍名：親と医師、教師が語る ADHD の子育て・医療・教育

著者　：楠本伸枝 岩坂英巳 西田清　奈良 ADHD の会「ポップコーン」

出版社：クリエイツかもがわ

（内容紹介）
第１章では、ADHD の子どもさんを実際に育てる中での不安や解決策など、楠本先生の体験談を読みやすくまとめてある。第２章では「ADHD の診断と治療」といった基本的なことを一般の方にもわかりやすくまとめてある。また、今も実際に奈良で行われている「なら ADHD 家族教室」ができた理由、会の進め方なども詳しく書かれている。この本を読むことで ADHD の子どもさんを育てる保護者の気持ち、教育していく教師の気持ちなども理解しやすくなる。

書籍名：俺ルール！　自閉は急に止まれない

著者　：ニキ・リンコ

出版社：花風社

（内容紹介）
幼い頃から周囲との違和感を持ちながら育ち、３０代になってアスペルガー症候群（知的面・言語面での遅れを伴わない自閉症スペクトラム）と診断された著者の実際にあった出来事が具体的に語られている。自閉専門書では感じることのできない子どもの内側を知ることのできる一冊である。また、このシリーズは全部で3作あり、「自閉っ子　こういう風に　できています」「自閉っ子、深読みしなけりゃうまく行く」なども参考になる。

書籍名：読んで学べる ADHD のペアレントトレーニング
　　―むずかしい子にやさしい子育て
著者　：シンシアウィッタム　著　　上林靖子 中田洋二郎 藤井和子
　　井潤知美 北道子　訳
出版社：明石書店

（内容紹介）
ペアレントトレーニングの流れに沿って「行動分析の方法」「してほしい行動をふやす方法」「してほしくない行動を減らす方法」「協力をひきだす方法」「制限を設ける方法」と大きく 5 つに分けて書かれている。１つ１つ子どもの反応と親の反応の例を挙げながらそれぞれについての解決策が書かれている。一般の方が読まれてもわかりやすく内容も十分理解できるものになっている。また、巻末には「バトルプラン」として「してほしくない行動」に対しての対処法が見やすく書かれている。

書籍名：AD/HD 児へのペアレント・トレーニングガイドブック
　　―家庭と医療機関・学校をつなぐ架け橋
著者　：岩坂英巳 中田洋二郎 井潤知美

出版社：じほう

（内容紹介）
ペアレントトレーニングの進め方のマニュアルとして書かれている。「病院・専門機関でのペアレントトレーニング」と「家族会でのペアレントトレーニング」に分けて実際に保護者に対してどのような説明をし、どのような課題を出していけばよいか等がわかりやすく記載してある。またペアレントトレーニングを行う上での素朴な疑問に対して Q&A 方式でわかりやすく答えが書かれており、ペアレントトレーニングを指導する際にとても役に立つ内容となっている。

書籍名：高機能自閉症・アスペルガー症候群　「その子らしさ」を生かす子育て
著者　：吉田友子

出版社：中央法規出版

（内容紹介）
高機能自閉症・アスペルガー症候群の子どもさんをもつご両親向けに書かれている本である。子ども達の特徴や家庭で出来ること、どこへ相談すればよいのか、兄弟児との兼ね合いについてなど親御さんの疑問に、具体的な解説がなされている。「がまんすることはどうやって教えるの？」「コミュニケーションの意欲をひきだすには？」「わざと叱られるようなことをする。どうしたら？」など毎日の生活の中で出てくる疑問に対して、発達の特性に合った支援を知ることができる。

書籍名：高機能自閉症・アスペルガー症候群入門
　　―正しい理解と対応のために
著者　：内山登紀夫　水野薫　吉田友子

出版社：中央法規出版

（内容紹介）
ADHD などとともに教育現場での対応が問題となっている高機能自閉症・アスペルガー症候群について、分かりやすく解説されているガイドブックである。医学的な理解から、小学校、幼稚園・保育園での具体的な対応の仕方まで、幅広く知ることができる。高機能自閉症の子ども達がもつことの多いこだわりや興味・関心の偏り、社会的認知の難しさに対し、特性を理解しどう援助すればよいのか、子ども達それぞれに適した方法を見つけるヒントが書かれている。

書籍名：アスペルガー症候群の子育て 200 のヒント

著者　：ブレンダ・ボイド著　　落合　みどり訳

出版社：東京書籍

（内容紹介）
著者のブレンダ氏にはアスペルガー症候群のお子さんがおり、この本では母親が息子の障害を受け入れながら、社会的スキルを教えていった実際の方法が紹介されている。アスペルガー症候群の子育ての知恵をまとめた、ヒント集といえる。子どもの成長により、これまでうまくいっていた方法が通用しなくなる時がくる。そんな時、新たな方法を考える具体的なアイディアが紹介されている。付録には「怒った時にやって良いこと・いけないこと」等の一覧表もついている。なお落合みどりさんはアスペルガー症候群当事者でもある。

書籍名：ササッとわかる アスペルガー症候群とその接し方

著者　：榊原洋一

出版社：講談社

（内容紹介）
アスペルガー症候群をできるだけ分かりやすく説明することを目的とした本である。図が多用されており文章も簡潔であるため、見やすく読みやすい。アスペルガー症候群についての素朴な疑問から、幼児期・学童期に見られる行動、そしてご両親の心配など、その特性を理解した上でどのような対応が考えられるのか、解説されている。アスペルガー症候群の子どもがどのような状態にあり、暮らしやすい日常を送るためには何ができるのか、具体的な方法を知ることができる。

書籍名：ササッとわかる 最新「ADHD」対処法

著者　：榊原洋一

出版社：講談社

（内容紹介）

ご両親や学校の先生を主な対象として書かれており、50 の質問に対して図や表を取り入れ、簡潔に解説されている。ADHD への素朴な疑問から、症状理解のための基礎知識、診断後に家庭や集団生活でできる最善の対処法などが紹介されている。ADHD の子どもに適切な対応をすることは、２次障害を防ぐことへとつながる。本人が無用に傷つくことのないよう、周囲が ADHD を正しく理解することが重要となる。家庭内でのしつけや兄弟児への配慮、学習面や友達との関係など、対応に悩んだ際に参考となる。

書籍名：家族・支援者のための発達障害サポートマニュアル

著者　：古荘純一

出版社：河出書房新社

（内容紹介）

現在、１０人に１人の割合で発達障害の症状をもつといわれている。本書では、乳・幼児期、学童期、思春期、青年期、成人期、それぞれの段階で必要な支援や対応が整理して解説されている。対象としては「広汎性発達障害」「学習障害」「注意欠陥・多動性障害」のお子さんに関わる「ご家族や支援者」である。発達障害のある子どもたちの成長過程においては、できるだけ多くの選択肢を提示し、その中から選んでもらい、適宜修正しながら長期的にみていく必要がある。子どもたちにとって、「いま」必要な支援を見つけるヒントとなる。

書籍名：あなたがあなたであるために
　　―自分らしく生きるためのアスペルガー症候群ガイド

著者　：ローナウィング監修 吉田　友子著

出版社：中央法規出版

（内容紹介）

サブタイトル「自分らしく生きるためのアスペルガー症候群ガイド」とあるように、当事者が自分らしい人生を、穏やかに、楽しく、堂々と生きていけることを願いとした本である。そのためには、アスペルガー症候群について正確な情報を知る必要がある。根底にある特有の神経学的な特性を分かりやすく説明した上で、アスペルガー症候群の人が毎日の暮らしの中でどのような困難を経験しているのか、それに対する具体的な対応についても提案がされている。短時間で、アスペルガー症候群の世界を垣間見ることのできる１冊。

書籍名：軽度発達障害の心理アセスメント

著者　：上野一彦　海津亜希子　服部美佳子

出版社：日本文化科学社

（内容紹介）

発達に関する心理アセスメントを医療機関だけでなくもっと教育現場に活用していただきたいという願いのもと、LD、ADHD、高機能自閉症など軽度の発達障害をもつ子どもたちの理解と支援に欠かすことのできない検査の活用方法を、WISC－Ⅲを軸に、K－ABC、ITPA なども含め、分かりやすく解説し、WISC－Ⅲの群指数から考えられる 14 タイプ 28 のアセスメント事例を紹介している。セラピストにおすすめである。

書籍名：図解　よくわかる ADHD

著者　：榊原洋一

出版社：ナツメ社

（内容紹介）

ADHD のお子さんに接する機会のある全ての人にとって、症状の現れ方や経過、子どもの成長に合った対応が分かる本である。また医療機関の関わり方や、治療法である薬物療法や行動療法、環境の工夫についても具体的に絵を用いながら解説されている。褒め方や叱り方の工夫、日常生活の中でできるサポートなど、家庭での対応や集団生活を送る際に気をつけたいポイントが詳しく、そして分かりやすく紹介されている。対応に迷った時のヒントが、数多く書いてある。

書籍名：図解　よくわかるアスペルガー症候群

著者　：広瀬宏之

出版社：ナツメ社

（内容紹介）

ご家族や保育園・幼稚園・小中学校の先生など、アスペルガー症候群のお子さんと関わる機会のある方を対象に書かれた 1 冊である。イラストが多いため、読みやすく非常に分かりやすい。対応の基本として、どのようなことばで、どのような話し方をすればよいのか、その工夫が紹介されている。また日常の中で起こりやすい 14 のトラブル(食べ物の好き嫌い、パニック等)が挙げられており、その対処法も知ることができる。診断についてや、家庭や集団での対応、さらには社会的自立について等、子どもの年齢に合った対応が分かる本である。

書籍名： AAC 入門
—拡大・代替コミュニケーションとは
著者　：中邑賢龍

出版社： こころリソースブック出版会

（内容紹介）
「自立」とは自分で決められることとして、障がいをもつ子ども達の「自己決定」を援助するための、「コミュニケーション支援」について述べられている。「AAC」の捉え方や「コミュニケーション意欲」を育てることなどの障がいをもつ子どもへの考え方や、「発信行動を引き出す」「シンボルなどのローテクエイド」「VOCA などのハイテクエイド」などの技法についても網羅されている。また、障がいの状況に応じた「コミュニケーション」の捉え方やその支援についてわかりやすく紹介されている

書籍名：構音訓練の為のドリルブック　改訂第２版

著者　：岡崎恵子 船山美奈子(編著) 今井智子，大平章子，加藤正子，
川田順子，竹下圭子，三浦真弓，山下夕香里 著
出版社：協同医書出版社

（内容紹介）
日本語の 50 音に並べて「目的語が語頭につく単語」、「目的語が語中につく単語」、「目的語が語尾につく単語」「目的語が入った文章」と書かれている。構音訓練を行う際に「か」がつく言葉などを即座に取り出すことができ訓練がスムーズに行える。また文章は短い文から並べられており順番に行えば少しずつ難易度を上げていくことができる。更に巻末には「イラスト索引」とあり、幼い子にも使いやすい絵カードによく使われている単語が 50 音に並べて記載されている。

書籍名：吃音
—言語聴覚療法シリーズ 13
著者　：都筑澄夫　編著

出版社：建帛社

（内容紹介）
吃音の評価方法から治療方法までがわかりやすく説明されている。吃音の治療を行う上での基本情報が全て書かれており、吃音の治療に取り組む前に 1 度目を通しておかれるとよいのではないでしょうか。また都筑先生が作成された吃音治療法の 1 つである「吃音年表によるメンタル・リハーサル法」の説明もわかりやすく書いてある。実際に使う方法なども細かく書かれており、すぐに臨床にも使用することができる。

書籍名：１・２・３歳ことばの遅い子
　　―ことばを育てる暮らしの中のヒント
著者　：中川信子

出版社：ぶどう社

（内容紹介）
言語聴覚士として第一線で多くの子供達と関わっている先生が脳と言葉のしくみや、運動・認知・言語・社会性の各課題をわかりやすい文章と楽しい図で説明してある。まずは１人で悩まないこと、そしてもしも遅れていたらどういう原因が考えられ（器質的原因、環境的原因、聴覚的原因など）、どう見守っていったらいいのか、など解説されている。不安を抱えていてもいなくても、ことばについて新たな発見になる楽しい一冊である。

書籍名：おいで、音の世界へ！
　　―聴覚障害の赤ちゃんをおもちの、聴者のパパとママへ
著者　：知茶子シュタイガー

出版社：人工内耳友の会「ＡＣＩＴＡ」

（内容紹介）
聴覚障害児のご両親だけでなく、補聴器や人工内耳に関わる人、療育者、医療に携わる全ての人に「聴覚障害がありながら音声言語を楽しむ意味」を知るためにお勧めしたい１冊である。聴覚活用教育（A-V 教育）は聴覚口話教育/音声言語とどう違うのか？具体的な関わりの方法についても親の立場でやさしく詳しく書かれている。

書籍名：コミュニケーションの発達と指導プログラム
　　―発達に遅れをもつ乳幼児のために
著者　：長崎勤　小野里美帆

出版社：日本文化科学社

（内容紹介）
発達に遅れをもつ乳幼児のコミュニケーション・ことばの力についての評価方法、また、その発達段階に応じた指導プログラムの設定・実施方法について書かれており、子どものコミュニケーション発達の促進と、大人とのかかわりのあり方を援助する方法が示してある。セラピストにおすすめである。

書籍名：健診とことばの相談

―1 歳 6 か月児健診と 3 歳児健診を中心に

著者　：中川信子

出版社：ぶどう社

（内容紹介）

お母さんの育児を励ます健診に！

子どもと家族を人生の見通しをもって支えよう！と呼びかけ、「ことばと発達」の相談と支援に必要な基礎知識と具体的方法をていねいに紹介してある。セラピストや保健師むけの書籍である。

書籍名：ことばをはぐくむ

―発達に遅れのある子どもたちのために

著者　：中川信子

出版社：ぶどう社

（内容紹介）

子どもの育ちとことばについて考える最適の入門書として、よく薦められる 1 冊である。著者は、母親であり言語聴覚士の中川信子さんで、ことばだけでなくその基本となる脳のしくみや聞こえについて、構音(発音)を発達させる方法など、幅広く具体的にかかれている。ことばを育てるためには、暮らしの中で発達の基礎をつくることが重要となってくる。基礎をつくり心とことばを育て、生きたことばを育むことの大切さについて、分かりやすいことばで述べられている。

書籍名：心をことばにのせて

―子どもとのいい関係とことばの育ち

著者　：中川信子

出版社：ぶどう社

（内容紹介）

ことばは人と人との間で育つものであり、子ども達のことばを育てるためには、大人が「良い環境としての大人」になることが必要である。この本では、大人と子どもの関係のあり方、ことばをひき出す関わり方、ことばかけの仕方が紹介されている。著者は言語聴覚士の中川信子さんで、子どもと関わる際の基本的な態度や、大人のはたらきかけ(子どもがしていることを真似する、大人が自分のしていることを話す、等)を知ることで、子ども達との関係をより深めるヒントになる。

書籍名：MFT 入門
　　－初歩から学ぶ口腔筋機能療法
著者　：山口秀晴・大野粛英・嘉ノ海龍三 監修

出版社：わかば出版

（内容紹介）
口腔筋機能療法（MFT）の考え方、方法などがわかりやすく書いてある。口腔習癖（特に指しゃぶり、舌突出癖）へのアプローチ法などが写真入りで細かく記載されており、機能性構音障害の治療の際に舌の動きが上手くいかない場合などはこの本を読むとわかりやすいと思われる。また、機能性構音障害の評価方法、治療方法などが紹介してあり、「正しい嚥下と誤った嚥下」ということで乳児から幼児、成人までの嚥下の仕方をわかりやすく説明してある。

書籍名：子どもの摂食・嚥下障害
　　―その理解と援助の実際
著者　：藤島一郎　尾本和彦　北住映二　編著

出版社：永井書店

（内容紹介）
摂食・嚥下障害をもつ子どもの多様な状態を解説し、リハビリテーションを含む援助法での多くの困難な点に対応するため、とくに合併症について詳述し、また第Ⅱ章「指導・援助・治療の実際例」に多くの頁をさいて詳しい事例報告（小児期からの障害の成人例も含め）を収載している。摂食・嚥下障害について子ども特有の問題の基本的な理解を深め，さらに援助の実際について具体的な手がかりを得ることができる。

書籍名：小児の摂食・嚥下リハビリテーション

著者　：田角勝　向井美恵　編著

出版社：医歯薬出版株式会社

（内容紹介）
現場ですぐに役立つ基礎知識から実際の臨床までを豊富な図表や写真・イラストでわかりやすく解説してある。基礎知識編では，解剖・生理学的視点における小児と成人との違い，健常児および障害児の摂食機能の発達過程について臨床的意義から解説してある。育児相談としても寄せられることの多い、子どもの成長過程における「食べられない，飲み込めない，丸飲みしてしまう」「指しゃぶりの是非は？」といった疑問や「離乳」「食育」などの考え方についてもコラム化し、 現場スタッフに知っておいてほしい知識も紹介してある。

書籍名：障害児者の摂食・嚥下・呼吸リハビリテーションその基礎と実践

著者　：金子芳洋　監修　尾本和彦　編

出版社：医歯薬出版株式会社

（内容紹介）

健常児の摂食機能発達および関連基礎知識として　嚥下の違いや離乳期における変化が、時期や食物形態、介助方法、口腔内の動きなどを解説してある。障害児者の摂食・嚥下障害の特徴や評価と診断、密接な関係がある「呼吸」「栄養」の問題、実際の指導場面での考え方や「食事形態」の捉え方などが述べられている。「知的障害者」が加齢に伴い、窒息や誤嚥、誤嚥性肺炎などが発生していることや、その問題に対しての食事形態の調整やチームアプローチなどが記述してある。

書籍名：食べる機能をうながす食事
　　ー摂食障害児のための献立、調理、介助

著者　：向井美恵

出版社：医歯薬出版株式会社

（内容紹介）

発達療法的な視点から、食べる機能に遅れのある子ども達に対する栄養・調理の対応を中心に、介助方法の基本をも含めることによって、毎日の食事で機能発達が促され、美味しさを味わいながら食べられるようになることを目的として書かれてある。とてもわかりやすい言葉で、簡単に書かれてあり、読みやすい内容とてなっている。

心・遊びの発達関係

書籍名：実践編 0~2 才赤ちゃんの能力を伸ばす本

著者　：久保田競

出版社：株式会社主婦の友社

（内容紹介）

0才～2才までを「感覚の発達」、「運動の発達」、「社会性の発達」、「知能の発達」に分け、お母さん向けに実際場面の写真と簡単な言葉で説明してある。月齢に合わせてどのような働きかけをすると上手く伸びていくのか、注意する点などをわかりやすくまとめてある。また巻末には「脳の発達と能力開発ここが知りたい、なんでも Q&A として脳のこと、視力のこと、言葉のこと、おもちゃのこと、危険を教えることなどについてわかりやすく答えてある。

書籍名：車椅子やベッド上でも楽しめるこどものためのふれあい遊び 50

著者　：青木智恵子

出版社：黎明書房

（内容紹介）

様々な状況にある「車椅子の子」「ベッドに寝ている子」など、どのような子どもでも楽しむことができるような簡単な遊びを広く集めてあり、様々な現場で子どもと接する方々や、日常生活の中でお母さん方が子どもと遊ぶ際に取り入れられる遊びが多く紹介してある。必要に応じてその子に合った遊びを活用していけると思われる。

書籍名：障害の重い子のための「ふれあい体操」
(障害児教育＆遊びシリーズ④)

著者　：丹羽　陽一　武井　弘幸

出版社：黎明書房

（内容紹介）

「ふれあい体操」は、子どもたちの心身とふれあいながら、寄り添い、心の言葉ややり取りをしていくための音楽を使った体操です。愛情いっぱいのふれあいと、歌いかけにより、子どもの自己身体意識(ボディー・イメージ)を高め、身体全体の感覚や身体の各部分のつながりをより明確に意識させる。この本では、「ふれあい体操」のねらいや対象、留意点、実際のやり方をイラストを交えわかりやすく紹介してある。楽譜とCD付きのため、すぐに実践でき学校の授業や家庭でのふれあい遊びに使用できる。

書籍名：子どもの心の発達がわかる本

著者　：小西行郎　監修

出版社：講談社

（内容紹介）

生まれてから就学前の五歳ごろまでに、子どもがどのように育ち、どのように周囲の人との関係を築いていくか、子どものこころの成長と発達について紹介されている。胎児期からの発達として動きや五感、新生児期の顔を見分ける力などの、赤ちゃんの優れた認知能力、子どもたちの自ら学ぶ力について、「ママの顔はどう見える？」「自分の存在に気付くのはいつ？」「言葉はどうやって覚える？」などと　科学的に明らかになっていることをわかりやすく記述されている。

書籍名：生きてます、15 歳。
　　―500g で生まれた全盲の女の子

著者　：井上美由紀

出版社：ポプラ社

（内容紹介）

全国盲学校論文大会にて優勝した作品であり、著者の井上美由紀さんは当時高校生である。井上さんが生まれる前に父は交通事故で亡くなり、そのショックにより母は早産した。体重わずか 500g の超未熟児として生まれた井上さんは、生まれながらにして視力を奪われていた。そんな娘が「生まれてきてよかった」と言えるよう、無我夢中で育てきた母の美智代さん。二人の強い絆とその一生懸命な生き方が描かれている。17 歳、21 歳と続編も出ており、母美智代さんが書いた本も出版されている。

書籍名：風と雲を友として

著者　：福島精彦 古巣馨

出版社：昭英出版

（内容紹介）

先天性脳性まひにより重度の身体障害をもつこととなった福島精彦さんが自分の半生を綴った手記をまとめ、カトリック島原教会の古巣馨神父が編集してできた本である。福島さんの知的探究心・好奇心の高さと、前向きで純粋な生き方が描かれている。「障害者の立場から見た戦中、戦後の激動期の日本が見える。命の大切さ・親子のあり方がクローズアップされている今、人々の心の中の明かりになると思う」と古巣神父が話されるように、障害の有無に関わらず、生きることの大切さと有難さを感じることができる１冊である。

書籍名：夢ありき。

　　―脳性小児マヒの息子あっての人生ドラマ

著者　：茂森 和子 茂森 政

出版社：SMI（東宣出版）

（内容紹介）

著者はハイブリッドエンジンを開発した技術者一家である、茂森夫妻。アメリカンドリームという大きな夢にチャレンジしながら生きる、脳性小児マヒの息子（勇さん）との感動体験が綴られている。勇さんは四肢麻痺があり電動車椅子にて生活している。22 歳でアメリカへと渡り、ハンディを乗り越えてカリフォルニア大学を卒業、アメリカのコンピューター関連の会社へ就職する。勇さんのホームページやブログもあり、勇さんの「今」を垣間見ることもできる。互いに支え合いながら、それぞれの目標に向かって生きる家族が描かれている。